

福祉施設における木製品生産の活性化 —林産試験場の取り組み—

林産試験場 性能部 構造・環境グループ 北 橋 善 範

■これまでの経緯

林産試験場では平成25年度から「地域活性化につながる木製品づくりの検討」というテーマで、北海道当麻町をモデル地域として研究を進めてきました。そこでは、当麻町の森林バイオマスの有効活用、廃校になった小学校の木工房としての再活用、そして地域の福祉施設での木製品生産の活性化に取り組みました。**写真1**は、その研究の一部で、福祉施設で生産可能な木製品として開発した『木製名札ケース』です（社会福祉法人 当麻かたるべの森 で生産・販売しています）。その後、当該研究は「地域力を高めるものづくり産業モデルの検討」というテーマに引き継がれ、現在も研究を進めています。これらの中で、北海道社会福祉協議会と連携することとなり、道内の福祉施設で行っている木工作業や、そこで生産している数多くの木製品を知る機会を得ました。



写真1 木製名札ケース

■福祉木工の推進にあたって

それぞれの福祉施設が持つ木工の技術、生産力は様々ですが、中には特徴的な福祉施設があり、道内では旭川春光会¹⁾のように材料生産（集成材生産やフラッシュパネル※の生産も可能）を行っている福祉施設や、稚内木馬館²⁾や新得わかふじ寮³⁾のように一般クラフト業界に勝るとも劣らない木製品を作っている施設もありました。こういった施設についてウッディエイジをお読みになっている会員の方々に知っていた

だくことにより、企業と福祉施設の連携が図られ、仕事を補完し合うことで、お互いにwin-winの関係を構築するきっかけづくりになるのではないかという想いが湧いてきました。そこで、林産技術普及協会の植杉専務を通じて、北海道社会福祉協議会の高橋修一氏にお願いし、北海道内の福祉施設の木工への取り組みについて記事をご執筆いただきました⁴⁾。その後、高橋氏よりご紹介を受けた福祉施設の代表者の方々ら四名それぞれに（**写真2**），さらには、個人の工房で障がいを持った方と共に歩みながら木工品生産を行っている北の夢木工（美唄市）の辻礼次郎氏に、取り組みを含めた施設や工房の紹介記事をご執筆いただきました⁵⁾。

このことで、多くの木材関連業界の方々に、道内の福祉施設や障がい者関連の作業所で行っている木工作業や製品を知つていただけたのではないかと感じています。

※ フラッシュパネル：芯となる材の両表面に合板を接着した軽量パネル

A screenshot of a news article from the "稚内木馬館" website. The article features a portrait of a woman, text about the facility's history and activities, and several small images showing wooden structures and equipment.

写真2 記事の一例
(稚内木馬館)

■大学との連携による福祉木工の活性化

上述の「地域活性化につながる木製品づくりの検討」という研究の中で強く意識したのは、地域の木材産業を活性化させるための一つの方策として、地域の福祉施設の木工を盛り上げる、という考え方でした。そのために重要なのが「魅力ある（売れる）木製品を開発する」ということ。手前味噌ではありますが、林産試験場は70年という歴史の中で様々な

木材加工の知識・経験を有し、それをいかした研究を行っています。しかし、「魅力ある製品づくり」という点は、我々だけでは解決が難しい部分でした。そこで、札幌市立大学デザイン学部の小宮加容子先生に協力を依頼し、大学の授業の中で、学生を主体として、障がい者が作業に参加できることを条件とした、魅力ある木製品のデザイン開発を一緒に行いました⁶⁾。学生には事前にこのプロジェクトの趣旨や、デザインした製品の生産を行ってくれる社会福祉法人当麻かたるべきの森の概要説明を行いました（写真3）。そして、学生に実際にかたるべきの森に来てもらい、合宿形式で製品デザインに取り組んでもらいました（写真4）。



写真3 授業ガイダンスの様子



写真4 合宿時の様子

写真5はその成果として製品化したものの一つ、ジャガイモ型積み木「じゃがの芽」です。この製品は、生産のほぼすべてを当麻かたるべきの森の利用者（障がいを持つ方々）が担当しています。木製ジャガイモは一つ一つ形が異なっており、仮に利用者が材を切り過ぎたり削り過ぎたりしたとしても、それが失敗とはならず、むしろジャガイモとしての魅力を引き立てるものになります。障がい者施設で生産することを考慮に入

れた、大変優れた製品です。ちなみに、袋のシルクスクリーン印刷も、旭川福祉園という障がい者施設で行ってもらいました。他には、当麻町といえば「でんすけすいか」ということで、スイカの形をしたオセロタイプのボードゲームを学生がデザインしました（写真6）。通常、オセロのコマは白黒の円盤ですが、このゲームではコマはスイカの種の形をしています。このコマは、当麻かたるべきの森が木工以外の作業として行っている陶芸担当の利用者が生産しています。このような、障がい者が生産に携わることのできる木製品開発のプロセスが評価を受け、今年度の「ウッドデザイン賞 2016」において審査委員長賞を受賞しました（写真7）。札幌市立大学との連携は今年度も継続して行っており、今年も学生のデザインによる新たな木製品を開発する予定です。



写真5 ジャガイモ型積み木『じゃがの芽』



写真6 スイカ型ボードゲーム『しろいたねくろいたね』



写真7 ウッドデザイン上位賞授与式の様子

■今後の課題

本州も含め、木工を行っている多くの福祉施設を視察させていただいた中で感じたのは、各施設によって作業の内容や質に大きな差があること、作業をするのは障がい者や高齢者なので、作業の安全性には一般的の場合よりもさらに深い配慮が必要なことの二点でした。これらについては、更なる研究が必要ではあります、ベースとなる作業を機械化、IT化することである程度クリアできる道が見えてきました。将来的には、これをさらに発展させ、同じ木製品を数多くの福祉施設において安定した品質で生産できるような仕組みを整えたいと思っています。その他、それぞれの福祉施設で生産できる木製品量はそれほど多くないため、大量生産（記念品製作等になると、一回に千個、二千個という数が発注されます）に対応できず、仕事が受けられないというケースもあることがわかりました。これを解決するには、施設間、ないしは施設-企業間ネットワーク等、横の連携ができるだけスムーズに行うためのシステム作りが必要です。以前、林産試験場では木材の受発注管理システムの構築を行った例もあり^{7,8)}、こういったシステムを応用しながら、大口の案件を受注した際に、余力のある施設がそれぞれ可能な範囲で仕事を選択して受けられるような仕組みを作りたいと思っています。

参考文献

- 1)日下貴博：福祉施設としての取り組み, ウッディエイジ2014年10月号, 1A-4A
- 2)阿部富士代：やさしい木の「ぬくもり」を、ウッディエイジ2014年6月号, 1A-3A
- 3)鈴木睦：福祉施設における木工への取組, ウッディエイジ2014年4月号, 1A-4A
- 4)高橋修一：道内障がい者就労支援事業所の取り組み～木工品商品づくりを通した地域連携にむけて, ウッディエイジ2014年2月号, 1A-3A
- 5)辻礼次郎：木工品づくりに夢をのせて～知的障がい者と共に歩む「北の夢木工」～, ウッディエイジ2015年2月号, 3A-5A
- 6)小宮加容子ら：授業を通じての授産施設「かたるべの森」木工製品のデザイン提案, 第63回日本デザイン学会概要集, 2016.7
- 7)石川佳生：道産木材・木製品の利用促進に向けた仕組みについて, 林産試だより2014年9月号, P22-23
- 8)石川佳生：木材流通の高度化による地域材の利用促進, 木材工業, 71(1), 2-7, 2016.1